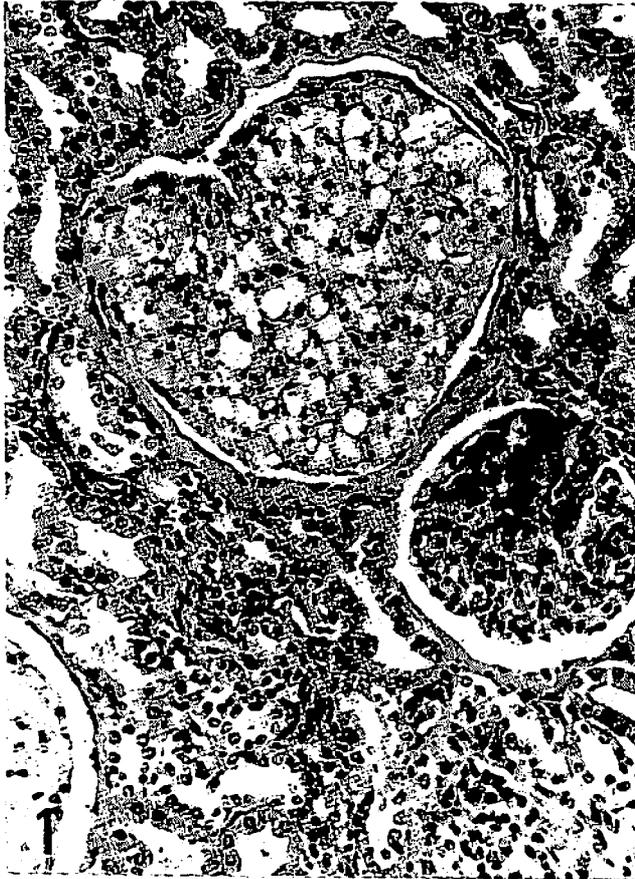


イヌの糸球体脂質症

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.247



動物：ポインター，雄，2才。

臨床所見：昭和50年5月，腰椎右側筋肉内の血腫除去のため切開手術実施。7月2日の再診時には上記手術創は化膿，サルファ剤，抗炎症剤を投与したが症状は漸次増悪。7月24日には軽度の腰麻痺が現われ，体温40.5℃，白血球数11,000，Ht41，血清総蛋白7.2g/dl，アルブミン2.9g/dl，A/G0.62，BUN10mg/dl，尿所見は蛋白100mg/dl，pH7.0。7月29日予後不良として安楽死，直後に剖検。

肉眼所見：剖検は開業医によって行われたが，主な所見としては第3～6腰椎右側筋肉内に膿瘍，同椎骨の骨膜炎が認められ，また腎臓はやゝ腫大，包膜下に小陥凹部が散在していたとのことである。剖検後腎，肝，脾，肺，副腎の一部の固定材料が送付された。

組織学的所見：提出した腎では，ボーマン嚢は線維性に肥厚し，糸球体との癒着のみられるものもある。糸球体は全体的に腫大，淡明化が顕著で，糸球体の全域あるいは一部が空胞状の胞体をもつ大型の泡沫細胞によって占められている(写真1)。同種細胞の胞体には黄色腫細胞類似の淡黄褐色微細顆粒を富有するものもあり，核の膨化あるいは濃縮などの変化がみられる。泡沫細胞には

Sudan IIIで橙赤色(写真2)，Nile blue 染色で赤紫色に染まる脂質の存在が証明された。さらに凍結切片の冷アセトンおよび冷エーテル48時間処理後にも不溶性のSudan III陽性の脂質がみられ，類脂質(リン脂質)の混在が推定される。鍍銀染色，PAS染色では泡沫細胞の出現する部位の糸球体血管，輸入管の肥厚，狭窄，崩壊がより顕著に認められる。なお，萎縮の著明な糸球体，近位尿管上皮細胞の一部にも少量の脂質がみられた。上記所見のほか間質における軽度のプラズマ細胞の浸潤も観察された。また肺ではプラズマ細胞の浸潤を主とする肺胞壁の限局性病巣，肝では類洞の拡張と肝細胞の萎縮がみられた。

診断：泡沫細胞の出現は腎糸球体に限られ，諸臓器の筋型動脈には著変なく，動脈に広範な病変を有する所見とは異なり，糸球体脂質症(Glomerular lipidosis)と診断する。以上のような腎糸球体への泡沫細胞の出現あるいは脂質の蓄積についてのイヌにおける文献記載は少なく，また泡沫細胞の起源についても糸球体内皮細胞，内葉上皮細胞(被蓋細胞)などが記されているが，本細胞出現の意義，臨床症状などなお未解決な点が多い。